

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370565

研究課題名(和文)コーパスを利用した初期中英語から初期近代英語のワードペアの通時的研究

研究課題名(英文) A Corpus-based Diachronic Study of Word Pairs from Early Middle English To Early Modern English

研究代表者

谷 明信 (Tani, Akinobu)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：90236670

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：英語の歴史的電子データHelsinki Corpusによりを、1150-1750年のテキストで見られるA and Bの形式のワードペアを調査した。1150-1350年と、それ以降の時代については、ジャンルの偏りと語彙の変化のため、聖書関連のジャンルを除いてワードペアからジャンルとの関係を確認することは困難であった。1350-1710年では、ワードペア使用は類似しており、その生起頻度と語源構成がジャンルと相関していた。法・公文書では頻度が高く借用語+借用語の割合が高い。一方、科学文書では頻度が低い。また、聖書や説教では、頻度は法文書と科学文書の中くらいであるが、本来語+本来語の割合が高い。

研究成果の概要(英文)：This study examined word pairs (WPs) in the form of "A and B" from early Middle English (ME) through late ME to early Modern English (ModE), using the Helsinki Corpus. The main results are the following: (1) it was difficult to discern the relation between genres from early ME to late ME and ModE because of lexical reorganization in ME and skewed genres in early ME while the use of WPs in late ME and early ModE was found to be similar; (2) WPs were found to be correlated with genres in late ME and early ModE concerning their frequency and etymological makeup. Legal and administrative documents shows highest frequency of WPs especially with etymological makeup of OF (Old French) + OF while scientific documents show little use. Bible and its related documents show frequency between two aforementioned genres with highest rate of OE (native word) + OE WPs.

研究分野：英語史

キーワード：word pairs binomials ジャンル phraseology 語源 頻度 Helsinki Corpus コーパス

1. 研究開始当初の背景

英語の A and B (time and tide) の形式のワードペア (別名 binomials) についての歴史的研究は、古英語から初期中英語の散文作品を研究した Koskeniemi (1968) が既に存在した。また、後期中英語については、個別作品に関する研究は多くの存在した。しかしながら、初期中英語(1100-1300)から後期中英語(1300-1500)の通時的な研究は十分になされてきたとは言えない。また、1066年のノルマン人の征服の影響で、フランス語借用語の大量流入により英語の語彙体系は再編成され、本来語に加えてフランス語借用語の割合が高まり、そのため、文体形成の方法が変化した。このような状況を勘案すると、初期中英語から後期中英語に生起するワードペアを研究することで、語彙変化のみならず、文体やジャンルの変化を解明することができるのではないかと予想された。

なお、Pahta & Nevanlinna (1997) は、Helsinki Corpus を利用してワードペアも調査しているものの、主として同格を研究対象とするものであり、調査対象自体が限定されており、新たな研究を行う必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、初期中英語から初期近代英語のテキストを含む Helsinki Corpus を主要資料として、ワードペアを調査することにより、(1) WP の様々なジャンルでの使用頻度とその構成要素の語源等の観点から WP 使用の史的変遷を明らかにし、(2) 先に調査した WP を文体マーカーとして利用することで、初期中英語から初期近代英語におけるジャンル・文体の史的発達を解明することであった。(2) については、初期中英語から後期中英語に起こった大量のフランス語借用語による語彙再編と、この語彙再編による英語の文体形成方法の変化を、WP というフレーズの調査により、明らかにすることを目指す。また、調査を初期近代英語まで時代を拡張することで、WP の研究があまりなされていない初期近代英語期での使用実態を解明する。

3. 研究の方法

Helsinki Corpus の初期中英語から初期近代英語(M/2/3/4 - E1/2/3)を調査資料として、ワードペアの用例をコンコーダンスソフト KWIC Concordance for Windows (日本大学塚本聡先生作)により、and, &, or, nor 等を検索し、その後、手作業にて当該用例を抽出する作業を行った。ただ、この作業で、用例があまりに大量で全ての接続詞を含む用例抽出をすることが時間的に困難であったため、特に and に注目し調査を行った。抽出した用例から、綴り字が一定していないために構成要素を OED の情報により見出し語化し、1語目と2語目に分け、さらに語源の情報を付加してデータベース化した。Helsinki Corpus は

元々、作品名、方言、ジャンル、翻訳かどうかなどの情報が付加されているため、特に作品名とテキストタイプのパラメータ情報を利用して、ワードペアとジャンルの関係を調査した。また、ワードペアがどの程度、固定化し定型表現かしているのかについても確認するために、繰り返し度と語順の逆転の割合についても、情報を付加した。

4. 研究成果

初期中英語から後期中英語の語彙と文体・ジャンルの変化について調査することが大きな目的の一つであったが、フランス語借用語による語彙の再編成が大きかったことと、初期中英語の残存するテキストのジャンルに強い偏りが存在すること、また、Helsinki Corpus 自体のジャンル設定が時代により一定していない(これはジャンル設定についての定説がないためでもあるが)ために、ワードペアの調査で概括的な調査結果を得ることはできなかった。

個々のワードペアについて言えば、古英語から存在した answer and say のような高頻度のワードペアや、meat and drink や body and soul のようなワードペアは調査した時代全てで見られた。ただ、これらのワードペアは聖書由来の句である。初期中英語から後期中英語のワードペアで共通のものは、基本的に、本来語 + 本来語のペアに限定される。例えば、man and woman や wit and wisdom など。従って、ワードペアの観点から言えば、聖書やそれに関連する分野での句の連続性は見られるものの、それ以外のジャンルで初期中英語から後期中英語のワードペアの表現としての連続性を確認することは困難であった。また、初期中英語のジャンルでのワードペアの頻度は後期中英語と大きく異なることは確かであるが、頭韻が大きな影響を与えており、文体形成の方法自体が変わってしまっている。

一方、後期中英語から初期近代英語については、違いはあるものの、基本的に類似している。特に法文書・公文書のジャンルでは、表現自体が共通している。ただし、これらのジャンルでのワードペアはフランス語の表現が基盤となっており、フランス語の影響が強く見られる。例えば、公文書に見られる lordes sp~uelx and temporelx というワードペアを含む表現は、フランス語の seignours spirituelx et temporelx を借用ないし真似た表現で、lord だけが英語の本来語で表現されている。同様に、lands and tenements も、フランス語 terres et tenementz の terres を lands に訳し、後者の語はフランス語からそのまま借用している。

後期中英語から初期近代英語についてはこのように類似しているため、ここでは谷(2017)に基づき、後期中英語での結果に焦点を置き、記述する。

まずはじめに、同じワードペアと言う用語

で呼ばれるとは言え、下記の2例からわかるように、ジャンルによりワードペアの構成要素の語彙特性はかなり異なることがわかる。

- (1) Wherfor the King oure Sov~ayn Lord by **theadvyce and assent** of the **lordes sp~uelx and temporelx** and the Co~mens of this p~sent parliament assembled and by auctorite of the same, **enacteth ordeyneth and establissheth** that . . . (CMLAW)
- (2) Mony diueris thyngis now here es, / Off **bestis and foulis** bathe **wylde and tame**; / +Get is nan made to +ti liknes / But we alone - A, louyd by +ti name. (CMYORK)

(1)は法文書で、ワードペア advice and assent、spiritual and temporal、ワードペアに類する3語のペア enact ordain and establish は全てフランス語借用語から構成されている。一方、(2)の聖書を題材とし、ギルドが運営していたヨーク劇で、ワードペアの beasts and fowls、wild and tame という本来語の構成要素から構成されており、身近な表現である。(1)の(lordes) sp~uelx and temporelx に関しては、語形が先に挙げたフランス語のように、形容詞が修飾する名詞 lordes “lords”の複数形に呼応するかのように複数形に活用しており、フランス語の影響は明らかである。

次に、ワードペアのテキストタイプによる頻度の違いを考察する。Helsinki Corpus の後期中英語 M3 と M4 でのワードペアのテキストタイプ (=ジャンル) 毎の正規化頻度を示す：

テキストタイプ	1000 語での生起頻度
Official letter	24.66
Law	23.13
Preface	19.84
Document	13.65
Philosophy	13.54
Fiction	10.36
Handbook, other	9.08
Mystery play	8.81
Deposition	8.12
Homily	7.14
Biography, saints lives	6.81
History	6.58

Romance	6.29
Bible	6.27
Private letter	4.72
Sermon	4.08
Religious treatise	4.03
Rule	3.75
Handbook, astronomy	1.51
Travelogue	0.54
Science, medicine	0.3
Handbook, medicine	0
平均	7.17

公式書簡、法文書、書籍の序ではワードペアの頻度が高いのに対して、科学分野の文書ではほぼ使用されておらず、実際、医学便覧では1例も見られない。一方で、聖書や説教などでは、その頻度がそれらの中間にあたる。このように、ワードペアの頻度とテキストタイプ・ジャンルが関連することがわかる。

法文書や公文書でのワードペアの頻度の高さについては、Burnley (1986)が curial style というラテン語の法文書由来の文体の存在を指摘したが、その文体の形式的特徴の一つがワードペアの使用である。したがって、この文体の元となった法文書・公文書でワードペアの使用が高いことは当然と言える。

なお、ワードペアについて、フランス語借用語を本来語で説明するという目的が指摘されることがあるが、科学分野でのワードペアの頻度を勘案すると、このような主張は正當とは言えないことがわかる。科学文書では文の形で説明を加えるのである。

次に、各ジャンルで使用されるワードペアの構成要素の語源構成の割合をパーセントで記した表を以下に示す(表中の OE は本来語、OF はフランス語からの借用語)。

ジャンル	OE+	OF+	OE+	OF+
	OE	OF	OF	OE
BIBLE	72.1	9.5	6.8	9.5
HOMILY	59.6	9.6	7.7	7.7
DRAMA MYST	56.5	12.4	9	9
ROMANC E	55.8	9.2	16.7	10.8
HANDB ASTRONO MY	54.2	25	16.7	4.2
REL TREAT	52.4	17.8	12.4	11.7
BIOGR LIFE SAINT	50	15.4	11.5	23.1
RULE	48.1	25.9	14.8	3.7

SERMON	37.6	21.7	17.8	18.5
LET PRIV	37	14.1	15.2	28.3
HISTORY	31.6	24.6	19.7	17.6
FICTION	31.4	23.8	20.9	19.7
PROC DEPOS	25	37.5	25	12.5
HANDB OTHER	23.8	37.1	24.8	9.5
LET NON-PRIV	18.4	38.8	28.4	9.5
PREFACE/ EPIL	15.4	40.7	20.3	20.3
PHILOSOPHY	11.7	38	25.1	20.5
DOCUM	9.3	50.7	20.4	15.9
LAW	6.5	63.8	18.5	6.2
SCIENCE MEDICINE	0	66.7	33.3	0
TRAVEL GUE	0	33.3	33.3	33.3
全体	31.8	30.6	18.1	14

この表から明らかなように、また、例文(1)と(2)からも明らかなように、聖書、説教、聖書に基づく劇では、本来語 + 本来語が多い一方で、フランス語 + フランス語が極端に少ないことが明らかである。それに対して、法文書、公文書ではフランス語 + フランス語のワードペアの割合が高く、一方で本来語 + 本来語の割合が低い。興味深いのは個人的な書簡(LET PRIV)と公的な書簡(LET NON-PRIV)では、本来語 + 本来語とフランス語 + フランス語のワードペアの割合がちょうど逆転しており、すでに後期中英語においては、改まり度(formality)とフランス語借用語の相関ができていたことは明らかである。

このように、ワードペアの頻度と語源が、ジャンルと密接に関わることをデータにより明らかにした。このようなワードペアとジャンルとの相関は、初期近代英語でも続くことになる。

しかしながら、現代英語ではワードペア使用の頻度はそれほど高くないことから、冗長な表現であるワードペアは法文書を除いては、文体的に古風な印象を与えることになり、後期近代英語での使用が減少していったと言える。このことは、英語散文での文長が歴史的に短くなっている事実とも並行していると言える。

次に、ワードペアの繰り返し度と変異度について、考察する。まず先に、10回以上繰り返して生起する例(現代英語の綴りで示す)と、その中で最も良く用いられるテキストタイプを表に示す。

ワードペア	N	テキストタイプ
<i>answer and say</i>	41	(BIBLE 26)
<i>spiritual and temporal</i>	26	(LAW 15)
<i>lands and tenements</i>	24	(LAW 14/DOCUM 1)
<i>mayor and commonality</i>	19	(DOCUM 18)
<i>mayor and alderman</i>	16	(DOCUM 13)
<i>father and mother</i>	15	(BIBLE 6)
<i>mayor and citizen</i>	13	(DOCUM 13)
<i>body and soul</i>	13	(REL TREAT 5/REL TREAT 10)
<i>day and night</i>	12	(BIBLE 5/SERMON 1)
<i>night and day</i>	11	(DRAMA MYSTERY 1)
<i>heaven and earth</i>	11	(BIBLE 5/DRAMA MYSTERY 1)
<i>God and man</i>	10	(SERMON 6)
<i>gold and silver</i>	10	(LAW 5)
<i>wit and feel</i>	10	(REL TREAT 10)
<i>Dean and Chapter</i>	10	(DOCUM 9)
<i>slay and murder</i>	10	(LET NON-PRIV 1)

生起数では、聖書で用いられる *answer and say* が一番高い。聖書では同様に *day and night* や *day and night* や *heaven and earth* を含んでいる。法文書(LAW)、行政文書(DOCUM)では *lands and tenements* や *mayor and commonality* など、繰り返し用いられるワードペアが存在する。

次に各テキストタイプの全ワードペアの中で、繰り返し使用されるワードペアの割合を調査した結果を表に示す。

Text Type	%
BIBLE	68.7
LAW	63.1
PROC DEPOS	62.5
DOCUM	52.1
HANDB OTHER	46.7
LET NON-PRIV	44.3
HANDB ASTRONOMY	41.7
DRAMA MYST	40.7
RULE	37
ROMANCE	35.8
REL TREAT	31.4
HOMILY	30.8

BIOGR LIFE SAINT	30.8
HISTORY	29.1
LET PRIV	26.1
SERMON	20.4
PREFACE/EPIL	20.3
FICTION	18
PHILOSOPHY	15.8
平均	37.8

聖書で、繰り返し使用されるワードペアの割合が一番高い。聖書に続いて、その割合が高い法文書・公文書では同じ表現を繰り返すことで、文書の内容の正確さを確保していることが予想される。なお、全体では、繰り返し度に違いはあるものの、ワードペア全 2855 例中 1117 例、すなわち 39.1%のワードペアが繰り返して使用されている。

最後に、ワードペアの構成要素の語順の入れ替えができるかどうかという問題を考察する。92 種類のワードペアで入れ替えが可能であることが分かった。そのように入れ替えができるワードペアのうち、その一方での生起数が 4 以上のものをまとめて、表にした。

	#		#
body and soul	13	soul and body	1
day and night	12	night and day	11
heaven and earth	11	earth and heaven	1
lord and king	11	king and lord	1
gold and silver	10	silver and gold	4
manner and form	9	form and manner	2
honour and worship	9	worship and honour	1
more and less	8	less and more	5
advice and assent	8	assent and advice	1
statutes and ordinances	8	ordinances and statutes	1
weight and measure	6	measure and weight	3
falseness and deceit	5	deceit and falseness	1

succor and help	4	help and succor	3
draw and hang	4	hang and draw	1
ordain and establish	4	establish and ordain	1
good and evil	4	evil and good	1
preserve and keep	4	keep and preserve	1
might and power	4	power and might	1

基本的に day and night を除いては、一方の頻度の方が高く、語順がある程度固定化していることを示す。この事は、語順の逆転がどの程度起こりうるのかを理解するためには、繰り返し使用されるワードペアでの逆転度を調査すれば良い。その調査結果のうち、繰り返し度が 10 以上のワードペアのみを取り上げ、そのうちの逆語順の起こる頻度を表にまとめた。

ワードペア	生起数	逆語順の数
answer and say	41	
spiritual and temporal	26	
land and tenement	24	
mayor and commonality	19	
mayor and alderman	16	
father and mother	15	
body and soul	13	1
mayor and citizen	13	
day and night	12	11
lord and king	11	1
heaven and earth	11	1
wit and feel	11	
meat and drink	10	
gold and silver	10	4
slay and murder	10	
god and man	10	
dean and chapitier	10	

この表からは、繰り返し度の高いワードペアは語順の固定化が進んでおり、語順の逆転は起こりにくいことがわかる。また、逆転するものは、この表で逆語順が可能なワードペアは、本来語 + 本来語のものである。ただし、実際には、過去の限られたテキストを対象と

する場合、ワードペアの固定度と変異度を厳密に計ることは困難であり、このような作業を繰り返す必要がある。

ここでは、ワードペアの頻度と語源がジャンル・テキストタイプと関係していることを確認した。また、ワードペアの表現としての固定度、すなわち、定型性について、ワードペアの繰り返し度と変異度から、考察した。

紙幅の関係により、ここで記述を終えるが、本研究の詳しい調査結果は、海外で出版予定の書籍に掲載する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

谷 明信「中英語における定型表現 - binomials の場合」*Conference Handbook 35* (日本英語学会) (2017/11), pp.206-211.

〔学会発表〕(計2件)

TANI, Akinobu. “Caxton’s Use of binomials for printing or translation?” 18th International Conference on English Historical Linguistics. University of Leuven (Belgium), 2014/7/16.

谷 明信「中英語における定型表現 binomials の場合」日本英語学会、東北大学、2017/11/18

〔図書〕(計1件)

TANABE Harumi, KANO Koichi, John SCAHILL IKEGAMI Keiko, TANI Akinobu and Others. *Linguistic Variation in the Ancrene Wisse, Katherine Group and Wooing Group*. Peter Lang, Berlin. pp. 197. (TANI の担当箇所 “Lexical Variation in the Four Major Manuscripts of *Ancrene Wisse*: With Special Reference to the Nero Manuscript.” pp.137-159)

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷 明信 (TANI, Akinobu)

兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号： 90236670